

帝都地下迷宮

中山七里

第五回

第三章 車輪の響き笛の声

1

「案外、頑張ってるじゃないか、鉄オタ」

いつの間にか常設となった相談窓口でひと息吐いていると、背後から声を掛けられた。振り向かずとも蓮はすつ葉はな物言いで黒沢輝美くろさわてるみのもの分かる。

「正直、もの三日もすれば音ねを上げるんだらうと思ってたんだけどな。いや意外や意外」

「どこがどんな風に意外だったんですか。ていうか、輝美さんは僕をどんな人間だと思ってたんですか」

1

「フツ―の男」

輝美はビール缶を振りながら言う。

「フツ―はさ、昼日中に太陽を避けてドラキュラ生活しているヤツらとお近づきになりたいと思うようなのは少ないよ。そういう集団の中に放り込まれても居づらいただけだね。ところが我が小役人くんは未だにめげないときている」

「その、小役人くんというのはやめてくれませんか」

「ああ、ごめんごめん」

謝罪の言葉を口にしてしているものの、にたにた笑いを見る限り、本心から悪いとは思っていないらしい。

「ここの住人はなかなか昔話も打ち明け話もしたがらないしね。秘密を山ほど抱えてっていうか、秘密そのものみたいな連中だし」

「連中だしって、輝美さんもその中の一人じゃないですか」

「……そういう切り返しをするヤツには見えなかったんだけどな」

輝美は不敵に笑って缶を突き出す。

「さては、誰かからわたしたちの身の上を聞いたのかな」

正直に答えるのは気が引けたが、かといって誤魔化すような才覚も持ち合わせていない。誤魔化すには、あまりに重い事実だった。

だから小日向は沈黙することにしたが、考えるまでもなく沈黙は肯定の印でもある。

早速、輝美が食いついてきた。

「黙っているところをみると凶星か。いったい誰から話を聞いたんだい」

「誰からでもいいじゃないですか」

小日向はせめてもの抵抗にそっぽを向く。

「大事なのは、そこじゃないでしょう」

間宮と香澄の話聞いてからも地下空間を離れようとは思わなかった。香澄の回想を聞いてからは尚更なおさらだった。

八ヶ部町はちかべちようの住人たちに降りかかった悲劇に、同情の念を禁じ得なかったといえば嘘になる。原子力発電所の実物を見たことすらない自分が、その悲劇を追体験しようとしても無理な話であるのは承知している。色素性乾皮症しきそせいかんびししようの痛み辛さを体感するのも同様に無理だ。

彼らに同情するのはとても簡単だ。だが、言ってみればそれだけだ。同情しかしてやれない。そして彼らにしてみれば、何のプラスにもならない。無責任な同情は無責任な非難と根っこが同じだからだ。安全地帯から放つものは同情も非難も変わりがない。

『どうしてあたしたちだけが、そんな罰ゲーム受けなきゃいけないのよ』

構内に響いた香澄の声が未だに忘れられない。あの言葉が小日向の心を安全地帯から連れ出してくれた。

「へえ。じゃあ何が大事だっというの」

「カッコつけていいですか」

「似合っているならね」

「できることをする、です」

自分で予想した通り、口に出してから後悔した。しかし撤回するてっかいつもりもさらさらない。

「それがどんなにちっぽけなことでも、自分にできることをする。

〈特別市民〉の称号を与えられたから言う訳じゃありませんけど、せめてそれくらいは心掛けないと称号もすぐに剥奪はくだっされそうです」

「この住人の病気を知っていても、そう言えるのかい」

もう輝美はにこりともしなかった。

「知っている前提で訊くんだけどき。小日向さんがやっている生活相談なんて、ホントにちっぽけなこと、できることからなんて聞

こえはいいけど、その実、自己満足でしかないかもしれないのよ」

「偽善という解釈ですか」

これは予想できた追撃だった。

「確かに自己満足かもしれないし、偽善かもしれません。だけど何もしない善よりはちっぽけでも行動に移す偽善の方がマシだと思いませんか」

間宮の受け売りになってしまうが、今なら言葉の真意が分かる気

がした。間宮がどれだけ意を尽くそうとも、(エクスプローラー)たちの色素性乾皮症を治療するのは困難だ。投薬も遮光も対症療法に過ぎない。治癒できない病人の治療にあたる医師の気持ちとはどんなものかと想像する。蠮螋の斧あるいは焼け石に水。報われないと承知して施す医療行為は、ひたすらに空しいはずだ。

間宮の発言は自虐を含みながらの抵抗であったことが、今更ながらに理解できる。小日向が生活相談を継続しているのも、一つには間宮の心意気に共感したからだった。

「間宮先生のことになっていることが無意味だとはどうしても思えないんですよ」

自分で青臭いことを言っているのは重々承知している。だが、口にしないことには収まりがつかない。自分が彼らと一緒にいる理由を説明できない。

「僕のこと自分が自己満足に過ぎず、(エクスプローラー)にとつて邪魔なものでしかなかったら、久ジイなり誰かなりが僕を追放してくれますよ」

「威勢のいいことだな」

「多少威勢がよくなかったら続きませんよ」

「小日向さん、若いよなあ。若い時はさ、誰でも血気に逸るんだよな。血気に逸らないと現実には押し潰されそうになるから。たださ、

そういうのは結局後悔する羽目になるよ」

何が不満なのか、輝美は尚も絡んでくる。

「小日向さん一人が泥を被るなら構わないが、それにここの住人が巻き込まれたんじゃ、割に合わないからね」

じゃあ、どうすればいいのかと訊こうとした時、二人の間に間延びした声が割り込んできた。

「輝美さんよお、あんまし若いモンをオモチャにしてやるなよ」

ながさわ 永沢は二人の間をとりなすように話し掛けてきた。

「そりゃあ輝美さんには青臭く見えるかもしれないが、青臭いのを好きなヤツは少なくないぜ」

「別にオモチャにしてる訳じゃないよ。どうせ関わり合いになるなら、覚悟を決めておかないと後々しんどくなるからさ」

「それくらいのことば間宮先生を見ていりゃ、馬鹿にだって分かるさ。それこそ偽善や売名行為だけでできるようなこつちやない。なあ、そうだろ」

同意を求められ、小日向はいやおう 否応なく頷く。

「間宮先生と同じことをしようなんてのは十年早いかもしれないが、爪の垢を煎じて飲むくらいはできるだろう」

「爪の垢くらいで効果なんてあるのかしら」

「入門編はそこらだろう。それにしても輝美さんは厳し過ぎるん

じゃないのかい。味方のハードル高くしてどうするよ」

「味方？」

「ああ、この若い公務員の兄ちゃんは俺たちの味方になるつつつてんだ。輝美さんがどう思うか知らないが、味方は多けりや多いほどいい」

「言ってることがよく理解できないのだけれど」

「久ジイの受け売りなんだけどな、俺たちはいつかお天道さんに照らされる日がくる。自発的に出ていくのか、それとも誰かに強制連行されるのかはともかくな」

思わず小日向は永沢の顔を見る。久ジイがそんなことを予言していたのは初耳だった。

「それって、久ジイの与太よたじゃないの」

「今まで久ジイの与太で大外れしたことがあったかよ」

輝美は黙ったまま、首を横に振る。

「だろ。それによ、こんな風に毎日毎日平穩に暮らしちゃいるが、哀しいかな俺たちは居住権を主張できない。ここは俺たちが買った土地でもなけりや借りた土地でもない。ホームレスと同様、不法に寝泊まりしているだけだ。だから政府筋に見つかれば立ち退きを余儀なくされる。輝美さんだつて見たことあるだろ。ホームレスたちのテント村が、強制執行とかで解体されたつてニュース。まさにあ

れがそうだ。あんな風に俺たちが強制的に排除されるってのは、空想でも絵空事でもない。目の前に迫っている事実なんだよ」

永沢には似合わぬ真剣な口調に、輝美も小日向も気圧けおされたように押し黙る。

「万が一そういう事態になった場合、頼りになるのは味方の数だ。政府筋でも民間でも、とにかくシンパを増やしておくに越したことはない。久ジイはそんなことを言っていた。もちろんその味方とやらに政治力や発言力が備わっているなら言うことはないが、まずは数だ。だから、小日向には俺たちの味方でいてもらわなきゃならない」

「はいはい」と

輝美は面倒臭そうに、また缶を振る。

「了解。移民を受け容れる度量のある国は好感持たれるし、久ジイが進めることにわたしが反旗をひるがえ翻せるはずもないし」

「仲良くやってくれや」

「ところがこの兄ちゃんにわたしとさかすき盃をく酌み交わすのが嫌らしくつてさ」

「あんたとなら、俺だって遠慮する。大体、輝美さんがうわばみ過ぎるんだって」

「へいへい。それならわたしや、寂しく一人酒といこうかね。邪魔

したね、小日向さん。あ、そうだ。間宮先生、どこにいるか知らない？」

「間宮先生なら、さっき香澄ちゃんの診察中だった」

「詳しいねえ。ひよっとして香澄ちゃんのストーカーなの」

「馬鹿言え。四方をカーテンで遮おかくって治療していた。あんな風に治療するのは香澄ちゃんの時だけだろう」

小日向の脳裏のうりに、パッチワークのようになった香澄の身体が浮かぶ。皮膚を見たことはなかったが、ひどくリアリティのある光景だった。

「ま、わたしと違って年頃だからね。あの齡はたであんな身体ってのは、確かにキツイわ」

去り際はさばさばしたもので、輝美は缶の中身を呷あおりながら小日向たちから遠ざかっていく。

「ええっと、取りあえずお礼言っときます」

小日向が軽く頭を下げると、永沢はよせというように片手を払った。

「礼を言われるようなこっちゃねえよ。傍はたで聞いていてちよっと厳し過ぎると思ったから、しゃしゃり出ただけだ」

「僕はまだ黒沢さんから信用されていないみたいですね」

「あの女は誰も信用してないんじゃないのかな。いつも酔っぱらっ

ていてはぐらかされるが、素面しむいふの時に真面目な話をした覚えがない」

「え。でも皆さんと同じ町民じゃなかったんですか」

「ふうん。やっぱりそこまでは知っている訳か」

「……すみません」

「まあ、いい。うーん、あんたには味方でいてもらわなきゃと言った手前、俺が不確かな情報を流すのもなあ」

「不確かな情報って何のことですか」

「いや、地下で暮らしているのが元は同じ町民だというのはその通りなんだが、生憎あいにくと俺は輝美さんを知らなかったんだよな」

「そんなのよくあることでしょう。限界集落じゃあるまいし、町民全員の顔を知っている方がおかしいですよ」

「理屈はそうさ。ただなあ、ここには百人近くの（エクスプローラー）が住んでいて、俺は大抵のヤツらの顔と名前は知ってたんだよ。ところが輝美さんだけは、この場所で初めて見掛けたんだよな。本人に直接訊いたら確かに八ヶ部の町民だって言うし、町のことも知っている風だったから信じはしたんだけどな」

信じはしたが、まだ疑いが雲散霧消うんさんむしやうした訳でもない——そういうニュアンスに聞こえた。

「でも、八ヶ部町の住人だったら、輝美さんも間宮先生の診察を受けているんですよね」

「（エクスプローラー）全員が先生の治療を受けている訳じゃない。遮光さえ完璧にできていたら、皮膚炎さえ発症しないヤツもいるからな。第一、百人全員が治療要の患者だったら、間宮先生一人じゃ保たんどぞ」

俄にわかに輝美への疑惑が生じるが、小日向はすぐに搔き消した。自分のように巻き込まれたのならともかく、輝美のような女が地下空間に住まうような理由は思いつかない。皮膚しっぺいの疾病わづらを患っている者たちの中に飛び込みたいと夢想する婦女子など、見たことも聞いたこともない。

「輝美さんが誰も信用していないというのは、何故なぜですか」

「あの通り、しょっちゅう呑んでくれているからさ。普通な、人間の酒を呑んだら本性ほんしやうを出すものだろ。ところが輝美さんときた日にゃ、素面の時がほとんどないもんだから何が本性か分からないんだ。あんな風に酔っ払っているのが常態なんだから、本心で何を考えているのか、さっぱり見当もつかん。これはもう俺の穿うがった見方なんだが、ありゃあ本心を隠すために普段から呑んでくれているようにしか思えんのよ」

「だから皆を信用してないって」

「ああ。身体中に棘とげとげ々にして人を近づけさせまいとしている。まるでハリネズミみたいじゃないか」

「あの……ハリネズミって、基本臆病な動物だって知ってます？」
「そうなのか」

「臆病だから、敵を威嚇いかくするような外見になっているんです。同じことが輝美さんにも言えませんかね」

「あのうわばみ女が臆病だったか」

「間宮先生には診みてもらってないだけで、香澄さん以上の症状なのかもしれないじゃないですか。ああ見えてとても繊細せんさいとか。それならいくら同じ身の上であっても、他人を近づけさせたくない気持ちも、安易な気持ちで皆さんとコミュニケーションを取るまいという気持ちも理解できます」

「繊細せんさいねえ」

永沢はどうにも腑ふに落ちないといった様子で頭を搔く。

「あのう、小日向さん」

呼ばれて我に返った。いつの間にか目の前には、相談者の一人であるおばあちゃんが立っていた。

「ちよおっと生活保護のことで訊きたいことがあって」

「あーっ、ごめんなさい。相談窓口、すぐに再開します」

咄嗟とつさに腕時計を見ると、午後十時を少し回ったところだった。

異変は日付が替わる頃に発生した。ひと通り住人からの相談を終

え、さて休憩しようかという段になってまた永沢が現れた。

「こつちに輝美さん、来てないか」

「いいえ。さつき別れてからは、一度も戻ってませんよ。輝美さんがどうかしたんですか」

「訊きたいことがあるからって久ジイが召集かけたんだが、どこにも見当たらない」

「外にお酒でも買いに出たんじゃないですか。もう深夜だからお日様気にせずに済むし」

「外に出る時はちゃんと誰かに言い残しておくのが規則だ。ところが、輝美さんが外出したなんて報告は誰も受けていない」

「でも、いい大人なんだし」

「退出記録がきっちりしているから秘密が護れる。今まで、こんなことは一度もなかったんだ。だから、みんな少し動揺している」

それにしてもたった一人の姿が見えないくらいで、少し大袈裟おおげさな印象は拭ぬぐえなかった。

「ひよっとして大袈裟だと思ってるのか」

凶星を差され、小日向はぎよっとする。

「大袈裟なのはその通りだ。だけどな、俺たちも大手を振って暮らしている訳じゃないから、どうしたって神経過敏になりやすいんだよ。文字通りの日陰者だしな」

気のいい永沢の顔が一瞬歪む。ゆが

「僕、探すの手伝いますよ」

「そうしてくれ」

急ごしらえの相談窓口を後にして、小日向は永沢に合流して搜索ちよの緒に就く。

久ジイの号令があつたせいか、(エクスプローラー)たちも総出で輝美を探しているようだった。香澄の姿が見えなかったが、永沢の話では地上へ買い出しに行っている最中だという。

「地上で輝美さんを目撃したら一報入れるように連絡してある。もし構内で見つからなかったら、地上での搜索隊を増員するつもりらしい」

「大搜索網ですええ」

「俺たちは地下迷宮には慣れているが地上、殊に秋葉原界限にはそれほど土地鑑とちかんがない。それは輝美さんも同じだ。だから地上に出たとしても、そう遠くまでうろつけないはずだ」

何しろ四六時中、買い出しや荷物を取りに行く以外は地下に寝泊しらくじちゆうまりしているのだ。土地鑑がないのも当然だろう。

「予報によれば明日はカンカン照りだ。もちろん本人は承知しているだろうが、露出の多い服で炎天下なんて歩いてみる。もの十分で全身火ぶくれになりかねんぞ」

永沢の声はいつになく緊張している。同病相哀れむというよりも、同病だからこそ深刻さを知悉ちしつしているのだ。

およそ百人の住人による一斉捜査だったが、しかし結果は捗々はかばかしくない。

「そつち、いたか」

「いない。呼んでも返事がない」

「誰かの時ねぐらにしけこんでるんじゃないのか」

「あの姐ねえさんに食指を動かすようなヤツがいるかよ。まだ他人のテントの中で酔い潰れている方がらしいや」

「輝美さんよー」

構内のあちこちから彼女を呼ぶ声が聞こえるものの、元より光源の乏とぼしい地下空間なので、電灯を翳かざしても隅々にまで光が行き渡らない。その陰にまで歩み寄らなければ何かひそが潜んでいても判然としない。つまりは非効率に虱潰しらみつぶしを続けていかなければ、人一人探せないということだ。

「そもそも地下下つてのは隠れる場所なんだよな」

永沢は自虐気味に言い放つ。

「自分らで隠れ住むには絶好の場所だが、こうして隠れられてみると手も足も出ない」

「投光器とかないんですかね」

「だからよ、隠れるための場所にそんな気の利いたものがある訳ないだろ」

永沢と二人で歩いていると、やがて四方をカーテンで仕切った場所に出た。言わずと知れた間宮の往診エリアだった。内側から灯りが洩れているものの、中に人がいるかどうかまでは分からない。

「ねえ、永沢さん。ちよつと変だと思いませんか」

「何が」

「あんな風に四方を遮るのは香澄ちゃんの治療の時だけなんですよね。でも、香澄ちゃんは買い出しで地上に出ているんですよ」

カーテンが閉まっている限り、前を往く者は香澄に気兼ねして決して中を覗のぞこうとしない。一人が隠れるにはうってつけの場所だ。言わんとする意味を理解したのか、永沢は無言で頷く。

「開けるぞ」

そろそろとカーテンに近づき、小日向に目配せをしてから裾すそに手を掛ける。

「永沢です。失礼しますよ、先生」

カーテンが開くのと、間宮が机から顔を上げるのがほぼ同時だった。

「ああ……しまった。居眠りしちゃったな。何かあったのかい、お二人さん」

「間宮先生、今までずうっと寝てたのかい」

「香澄ちゃんの診察を終えてカルテを書いている間に寝入ってしまったらしい。ところで二人して何の騒ぎだい」

輝美が行方不明になっているのを聞かされると、間宮は面目なさめんぼくそうに唇を曲げた。

「うーん、カーテンの前を通過したとか証言できればいいんだろ
うけど、この通り不様ぶさまを晒ひしてしまったからね。申し訳ないが何の情
報も提供できないよ」

だから、と間宮は付け加えて立ち上がる。

「わたしも探そう」

こうして間宮を加えた三人は、めいめいに懐中電灯を翳しながら
線路の上を搜索し続ける。

しばらく歩いていると、ひととき大きな光源が揺れながら移動し
ていた。接近してみれば、久ジイと取り巻きの数人かんだが神田駅かんだの方向
に駆けていくところだった。

「おお、間宮先生に永沢くん。小日向くんまで。ちょうどよかった。
先生にも知らせようと思っと思ったんだ」

「久ジイ、ひよっとして輝美さんが見つかったんですか」

「見つけたらしい」

しかし久ジイの顔色は優れない。

「ただし、あまりめでたくない状態という話だ」

意味ありげな物言い、小日向は不安に駆られる。知らず知らずのうちに足が速くなる。

輝美のいる場所はすぐに分かった。神田駅の手前約五十メートルの地点から多くの光が洩れている。

「見つけたんだって」

「ああ、久ジイ」

中心を囲んでいた輪が崩れ、その隙間から小日向は目撃した。

神田駅に続く線路の上に、輝美の身体が横たわっている。

だらしなく伸びた四肢、不自然に捻じ曲がった首。

顔に生気は見られない。こめかみの辺りにはひと目でそうと分かる打撲痕があり、そこから溢れた大量の血が顔半分を斑に染めていた。

「間宮先生」

久ジイに促されるまでもなく、間宮が腰を落として輝美に触れる。強引に目蓋を開き、手首の脈動を調べる。一連の動きは見守る者の不安を一層掻き立てる。

やがて間宮は輝美の腕を元に戻すと、力なく首を振った。

「駄目です。もう事切れています」

「死んでおるのかね」

「解剖しなければ詳細は不明ですが、他に外傷らしい外傷が見当たりません。おそらく側頭部の打撲が直接の死因でしょう。かなり深い傷です」

途端に周囲の気温が急低下したような気がした。

つい最前まで缶ビールを片手に説教をかましていた人間が、今は冷たい骸むくろとなつている。その動と静の落差に思考がついていけない。「事故か何かに巻き込まれてもしたかね」

「打撲は頭部です。構内を電車が走っていたのなら、飛ばされた石で怪我をする可能性もあるでしょう。しかしこの空間に電車はありません」

「天井から欠片かけらが落ちてきたとか」

「可能性がなくはないですが、それなら打撲は頭頂部になればおかしい。頭部に向かつて真横の力が働かなければ、こういう傷にはならんでしよう。また、転んだという解釈も苦しい。もちろん打ちどころが悪ければ傷もできますが、こんな風にピンポイントで殴つたような痕にはならないと思います」

「事故ではないと言うのかね」

「久ジイ、これは警察の領域ですよ」

抑揚よくようのない、しかし決然とした口調が空気を張り詰めさせる。

「事件性が検討される案件です」

間宮はゆっくりと立ち上がり、久ジイの決断を迫っているようだった。

「どうですか。医師としては警察および検視官の出勤を要請したところですが、この責任者はあなただ」

「ここに、警察を呼ぶというのか」

「警察が入れば、犯行現場一帯は立ち入り禁止となるばかりでなく、構内全体が捜索の対象となるでしょう。もちろん、この住人はほぼ全員が事情聴取を受ける羽目になる」

久ジイの顔に躊躇ちゆうちゆうが浮かぶ。当然だろう、と小日向は思う。いくら事件とはいえ、この地下空間に警察関係者を呼び込めば「ヘクスプローラー」のことが全て露見ろけんしてしまう。露見してしまえば、彼らもタダでは済まない。不法占拠か不法侵入か、いずれにしても住人全員が何らかの罪を問われる。もちろん、この場に居住し続けるのも許されないに違いない。

永沢たち住人も思い至ったのだろう。深刻そうに久ジイの回答を待ち構えている。

常識人であれば、そして善良なる市民であればここは警察に通報するのが真つ当で唯一の選択肢だ。

だが久ジイは善良なる市民である前に「ヘクスプローラー」の長老だった。

「警察の介入は好ましくない」

久ジイが洩らすと、永沢たちはほっと安堵あんどした様子だった。見れば、質問した間宮もその回答を期待していたようだ。

「地上の人間をここに入れてはならん」

「しかし久ジイ、輝美さんをこのまま放置しておくことはできませんよ」

「放っておくつもりはない。輝美さんの亡骸なきがらはちゃんと警察に引き渡す。捜査もしてもらう」

「しかし、どうやって」

「輝美さんには申し訳ないが、亡骸を移動させてもらう。ここに住人には危害の及ばない場所まで運ぶ」

つまりは隠蔽いんぺい工作に他ならない。だが「エクスプローラー」たちの安全と犯罪捜査の両立を考えれば、やむを得ない決断だった。

間宮は仕方ないというように首を振り、再度久ジイの決断を迫る。

「それがあなたの決断なら……では、どこに移動しますか。地上に？それとも間近にある神田駅構内に？」

問われた久ジイはしばらく考え込んでいる様子だったが、やがてゆるりと小日向の方に振り向いた。

瞬間、背中を悪寒おかんが走った。臆病者の特技、危険を予知する本能が発動したのだ。

「小日向くん、悪いがあんたの知恵と力を借りたい」

2

「僕が、ですか」

我ながら間の抜けた返事だと思ったが、反射的に出る言葉は繕いようがない。

「左様。神田駅構内では警察の捜査が萬世橋駅方向に伸びる惧れがある。元より壁一枚で仕切られているだけの空間だから、いったん搜索されれば露見するのはあつという間だ。それだけは何としても回避したい」

「じゃあ地上に」

「この中で地上に一番土地鑑があるのは君だろう。どこに移動させればいいと思うかね」

秋葉原には多少の土地鑑があつても、死体の置き場所など心当たりがあるはずもない。

「僕は犯罪に疎くて」

「これは犯罪ではない。高度に政治的な判断だよ」

間宮までが尻馬に乗って追い詰めてくる。

「迷っておる暇があつたら、さっさと考えてくれんか」

久ジイにそこまで言われたら従わない訳にもいかない。小日向は脳裏に秋葉原周辺の地図を展開し、どこか格好の場所はないかと検索し始める。

「とにかく死体を隠すのではなく、移動させるだけだ。警察が死体を発見しやすい場所を考えてくれんか」

無茶な話だと思った。

「身元を隠す必要もない。どうせ免許証とか身分を証明するものも、最終住所地は都内のアパートになっておるはずや」

「それは確認してみる必要がありますね」

間宮はこんな時でも冷静だった。輝美の着衣を探り、やがて札入りにスマートフォン、そして身分証らしきものを取り出した。

身分証を一瞥いちべつした間宮が、大きく目を見開いた。

「驚きましたよ、久ジイ」

「どうかしたかね」

「前々から疑念はあったんですが、これではつきりました。黒沢輝美は八ヶ部町の住民ではなかったようですね」

そう言いながら、身分証を皆の前に掲げてみせた。

二つ折りの証明書。上部には毅然きぜんとした輝美の顔写真・階級・氏名・職員番号。下部には金色のバッジがくすんだ光を放っている。

紋章は旭日きょくじつ、階級は巡査部長とあった。

「警察官……」

「それもただの警察官じゃない」

続いて間宮は身分証が収められているパスケース部分から名刺を一枚取り出してみせた。

所属は警視庁公安第一課と記載されていた。

「選りに選って公安かよ」

小日向の真横にいた永沢が素つ頓狂な声を上げる。

「この酔っ払い女が公安の刑事だったなんて。何ともおっそろしい演技力だな」

輝美が刑事と判明した瞬間から親近感が失ってしまったのか、永沢の口調はいくぶん辛辣しんらつに聞こえる。他の者も似たような反応で、さっきまでの同情や哀悼あいとうの代わりに侮蔑ぶべつと敵意が顔に出ている。久ジイに至っては、裏切られた者特有の悔しさが唇の形を捻ねじ曲げている。

「どうして公安の刑事が潜入しておったのかな。間宮先生はどう考えるかね」

「公安第一課といえば、極左集団の情報収集が仕事だと聞いたことがあります」

「極左。わしらがかね」

久ジイは呆気あつけに取られたように口を半開きにする。

「わしらはデモをしたこともなけりや、ビラ一枚配ったこともないぞ。そりゃあ原発には恨み骨髓こつずいで再稼働には反対の立場だが、だからといって表立った抗議活動なんかただの一度もしたことがない」
全くだ、と永沢が言葉を継ぐ。

「極左ってアレだろ。官公庁や大手企業のビルに爆弾仕掛けたりテロ行為したりするヤツらのことだろ。ふざけんよ、俺たちや半数以上が高齢者なんだぞ。ジジババに爆弾抱えさせようってのかよ」
「お天道さまを避けて日中は地下で暮らす。傍はたから見れば、わしらは充分怪しげな存在に映るかもしれん」

久ジイは仕方ないというように、力なく首を振る。これに反発したのが別の住人たちだった。

「馬鹿なこと言うなよ、久ジイ。俺たちだって好きでこんなところで暮らしている訳じゃない。全部国の責任じゃないか」

「そうだ。あの高速増殖炉の事故さえなけりや、皆普通の生活を続けられたはずなんだ。それを台無しにしたのは、あいつらじゃねえか」

「地下に住むよう、最初にアドバイスを寄越したのもあいつらなんだろ？ 手前で提案しておきながら今度は極左扱いって、どういう料簡りょうけんなんだよ」

「勘違い以前に悪意あるだろ、これは」

「それにしても見損なつた。まさか輝美が公安の刑事だったとはよ。女だてらに呑みつぶりもきつぷもよかったから憎からず思つてたんだが、とんだ女狐めぎつねだったって訳だ」

「俺たちと呑んでたのも情報収集の一環だったんだ」

「ひでえ女だよ」

「チツキショウ。こんな女に家族の話なんてするんじゃないよ」

「俺は散々さんざん、国への不平不満を喋つた。あれも全部、公安には筒抜けだったのかよ」

群集心理は怖ろしいと思つた。ついさつきまで仲間と信じていた者が自分たちを裏切つていたと知るや否やいな、天敵扱いで死者むとぢに鞭を打つ。

次第に剣呑けんのんな雰囲気になり、小日向も久ジイの要請を断れない空気が醸成じょうせいされつつある。

だが、小日向には鬱陶うつせうしさ以前に言い知れぬ不安がある。

地下空間は「エキスプローラー」たちの樂園だ。小日向のような粗忽者こつものが紛れ込まない限り、全員が元八ヶ部町の住民たちで構成されるコミュニティでもある。言い換えるなら、この場所に存在している者は小日向を加えた「エキスプローラー」だけということになる。

つまり輝美を殺した犯人は、この中にいるのだ。

小日向は集まった人々の顔を怖々と見渡す。

久ジイに間宮先生、永沢に霜月径子^{しもつきげいこ}。四人以外にもすっかり顔馴染みとなった住人たち。

この中に犯人がいる。

この中の誰かが輝美を殴り殺した。

粗忽者の自分が気づく^{きづく}のだから、へクスプロローラー^{ヘクスプロローラー}たちが気づかないはずはない。皆、気づいているか気づかないふりをして^{して}いるのだ。

足元から恐怖が、頭からは猜疑^{さいぎしん}心が迫^{おそ}ってくる。急に彼らが異なる文化を持つ異邦人^{いほうじん}のように思えてきた。

このまま逃げてしまおうか——頭の隅でちらりと考えた時、耳慣れた声が聞こえてきた。

「輝美さん、見つかったんだってえ」

萬世橋駅の方から香澄がやってきた。両手に持ちきれないほどのレジ袋を提^ひげているので、買い出しから戻った直後なのだろう。

「その子に見せちゃいかんっ」

咄嗟に久ジイが警告したが、香澄の動きの方が早かった。

「輝美……さん？」

遅ればせながら小日向は香織の前に立ち塞^{ふさ}がる。見てしまったものは仕方がないが、ずっと見せ続けていいものではない。

「輝美さん」

手に提げていたレジ袋を落とすことはなかったが、香澄は茫然自失の体で突っ立っている。

薄暗がりの中でも顔色が悪いのが分かる。思わず小日向は、彼女を支えるように両肩を掴んだ。

「大丈夫か」

「どうして、こんな」

「その話は後にしよう。今は他にすべきことがある」

「小日向さん、何を言ってるのよ」

「彼女の死体がここにあると大勢が迷惑する。だから遺体を地上のどこかに移す」

「移すって……輝美さんが可哀想だと思わないの」

「みんなはそう思っていないみたいだ。可哀想かもしれないけど、身分を隠していた輝美さんも悪い。輝美さんは警視庁公安部の刑事だったんだよ」

「……嘘」

「ちゃんと身分証があった。同じ公務員だから言う訳じゃないけど、あれはレプリカとかオモチャとかじゃない。れっきとした本物だ」
「どうして公安の刑事が地下に潜入しているのよ。あたしたちがどんな危険人物だっていうのよ」

「だから。そういうの、今は全然分らないんだったら。それより

も香澄ちゃんたちに飛んできそうな火の粉を振り払うのが先決だろう」

話しながら、小日向は自分で自分を追い込んでいることを知る。

香澄に告げる度に、ますます遺体の移動が自分の役目になっていく。

「誰か、香澄ちゃんを遠ざけてください」

「いいとも」

絶好のタイミングで間宮が香澄の身体を支えてくれる。これで小日向は心置きなく悪事に専念できる。

「一人じゃ無理だろ」

永沢がずいと前に出てきた。

「いくら女の身体でも、眠りかけていると結構な重さになる。死体だったら尚更だろう。あんた一人じゃ運ぶのも難儀だぞ」

「ありがとうございます」

礼は言ったものの、申し出は有難迷惑でもあった。協力者がいればますます断れないではないか。

「手伝うのはいいんだけどよ。いったいどうするつもりだい。まさか万世橋署の前に置き去りにしておくとか」

「どうして一番危ない方向にいつっちゃうんですか」

「けどよ。万世橋署前なんて、いつも棒切れ持った若いお巡りが一人で立ってるだけだろ。だったらその一人を陽動すりゃあ何とかな

るんじゃないのか」

「それにしたって、わざわざ火薬庫の中に啞えタバコで入っていくようなものですよ」

「じゃあ、どうするっていうんだ」

自他双方から追い詰められるかたちとなり、小日向は必死になつて頭を働かせる。散々考えた末にやっと思いついたのは、至極単純ながら確実と思える方法だった。

時刻は深夜零時三十分を少し回ったところだった。

「そろそろだな」

銀座線神田駅、例の証明写真ボックスの裏に潜んでいると、永沢が小声で話し掛けてきた。あと四分もすれば下りの終電がホームに滑り込んでくる。

小日向と永沢は輝美の死体を両脇から抱えている。永沢が言った通り、動かなくなった身体は男二人がかりでやっと運べるほど重かった。

来た。

耳を澄ませていると、終電の走行音が遠くから聞こえてきた。

電車はホームに滑り込んで停車、続いて乗客の足音が響いてくる。

小日向はボックス裏から外の様子を窺う。終電過ぎに証明写真を撮

る者もないだろうと読んでいたのだが、果たしてボックスの中に入ってくる者は皆無^{かいむ}だった。

「行きます」

小日向がまず隠しドアを開けてボックス内に侵入する。続いて輝美の死体を引き入れて、最後に永沢を迎え入れる。定員一名のボックス内は身動きすら取りづらい状態となった。

「早くしろ。この態勢じゃ保たんぞ」

小日向はカーテンを細めに開けて外の様子を窺う。既に乗客の波は途絶え、駅員の姿も見えない。

「今です」

小日向の合図で永沢がタイミングを合わせて輝美の死体を担ぎ出す。ボックスの外に出た二人は先刻と同様、彼女を両脇から抱えて一番出口へと向かった。

輝美には「ヘクスプロラー」の一人から借りたパーカーを着せている。パーカーのフードを下ろして運んでいると、酔い潰れた友人を支えているようにしか見えないはずだった。終電後の光景としては、ごくありふれたものだった。もちろん出血した打撲痕を隠す意味もあるが、逆にいえばフードを捲られたら一巻の終わりになる。

至極単純な方法というのはそういう意味だった。死体を袋詰めにするとか、資材運搬用トロッコで遠くの駅まで運ぶとか様々な方法

を検討したが、徒いたずらに証拠を残す割に発覚する危険性が高かった。何より地下鉄構内の日常に溶け込んだ方法でなければ、目撃された際の違和感が大きい。

それでこの方法を採用することにした。終電過ぎ、日常的に見掛ける光景。道具は最小限に済ませ、堂々と人前を歩く。堂々とした振る舞いは却かえって人目につきにくいものだ。

「けど、本当に大丈夫なのかよ」

運んでいる最中も、永沢が小声で尋ねてくる。

「いくらありふれた光景でも監視カメラとかで記録されるだろ」

「証明写真ボックスから一番出口にかけてはカメラが設置されていません。唯一の死角なんです」

「何でそういうことに詳しいんだよ」

「鉄オタ、廃線マニアだったら、まあこれくらいは」

「……オタクが犯罪予備軍だったのは、満更嘘まんごらじゃねえな」

輝美の死体を担いで一番出口の階段を一段ずつ上っていく。

神経を集中させていると、下から人の近づく気配がした。事前に打ち合わせた通り、一度も振り返らない。不自然な振る舞いを見れば、それだけ目撃者の記憶に残りやすくなるからだ。

しかし声を掛けられたら上手くやり過ごせるだろうか。手伝いを申し出られたら、どう返せばいいのか。万が一にもフードを上げら

れたら、どう対処するのか――。

足音が間近まで迫ってくる。全身の毛穴が開いたような気分になる。

こつちを見るな。

声を掛けようなんて思うな。

こういう時こそ都会人の無関心を發揮してくれ。

自分だけではなく永沢の心音までが響いてくると思えた。

行ってしまえ。行ってしまえ。

「あの」

背後からいきなり話し掛けられて心臓が跳ね上がる。

「ごめんなさい、道、ちょっと空けてください」

「あ、ああ、すみませんすみません」

小日向が階段中央に身を寄せて隙間を作る。

「ども」

すれ違ったのは大学生風の男だった。幸い、小日向たちには目もくれずに階段を上っていく。

同じ緊張を味わっていたらしく、永沢が大きく安堵の溜息を吐いた。

「勘弁してくれよ……」

「永沢さん、案外こういうの向いてませんね」

「向いてて威張れるこつちやねえぞ」

やつとの思いで階段を上りきる。予想通り中央通りはまだクルマの行き来があるものの、歩道を往く者の姿はごくまばらだった。

小日向たちは北方向に少し歩き定食屋の角で左折する。幅員四メートル未満の一方通行道路。狭い上にしょっちゅう工事中なので、神田多町界隈では最も人通りの少ない場所だった。しかも防犯カメラは一台も設置されていない。

雑居ビルの立ち並ぶ地域で、スナックが点在するものの多くは地階や階上に店舗があるので人目にもつきにくい。こんな言い方をすれば近隣住人は怒るだろうが、人知れず死体を運ぶにはうってつけの場所だった。

「よくこんな場所、知ってたな」

「会社の先輩と呑む時に通ったことがあって」

不意に瀬尾の顔が脳裏に浮かんだ。あの屈託なく笑う男は、今頃布団の中で寝息を立てているだろうか、それとも家呑みと洒落込んで一人で杯を傾けているのか。

大いなる日常、世はなべて事もなし。

ところが自分ときたら、知り合って間もない地下の住人とともに、これまた知り合って間もない女の死体を担いでいる非日常だ。いったいこの違いはどこで生じたのか。

芸は身を助けるという諺ことわざがあるが、小日向の場合は趣味が身を滅ぼすといった有様だ。つくづく自分は世渡りも要領も悪いのだと愚痴ぐちりたくなる。

更に進むと人通りは完全に絶えた。念のために振り返ってみたが、後方にも人影は見当たらない。

「この辺でいいです」

雑居ビルとビルの五十センチほどの隙間。小日向と永沢は死体からパーカーを剥ぎ取り、そのまま上半身を隙間に押し込んだ。暗がりでは突き出た足も闇に紛れる。酔っぱらって寝入ってしまったように見えないこともない。ただし明るくなれば、生気が失せているのが打撲傷とともに分かってしまうだろうが、別に構わない。

忘れるところだった。

小日向は慌てて死体から靴を脱がせる。元々輝美の履はいていたスニーカーだが、銀座駅に出る前に靴底を徹底的に洗っておいた。パターンの溝に残存した土から、萬世橋駅を手繰たぐられるのを防ぎたかったからだ。

いったん脱がせたスニーカーの裏に周囲の土を馴染ませてから履かせ直す。これでパターンからは周辺の土しか採取できないはずだった。

せめて合掌がっしょうだけでもしてやりたかったが、こんな場面を目撃され

たら終わりだ。こころを鬼にして踵きびすを返す。永沢も無言で小日向に続いた。

逃げ出してはいけない。

何事もなかったかのように平然と、ゆつくりと元来た道を引き返す。中央通りまでたったの百メートル足らず。

その、たった百メートルが果てしなく遠く感じられる。ようやく定食屋の看板が見えた時には、安堵で腰が砕けそうになった。

しかし中央通りに辿り着いた途端、小日向の身体に変化が生じた。膝から下が猛烈な勢いで笑い始めた。手で押さえたが、まるで他人の足のように言うことを聞かない。

「あんたもか」

永沢の声に振り向けば、彼は自分の両肩を抱いている。

「震えが止まらん」

二人は顔を見合わせる。どんな表情をしているのか分からず、結局取ってつけたような笑顔になる。

打ち合わせでは永沢が地下に戻り、小日向は自分のアパートに戻る予定だ。

「じゃあ」

永沢が背を向けた時、反射的に声が出た。

「あ、あのっ」

「何だよ」

「みんな、知ってるんですよね」

「だから何が」

「輝美さんをあんな風にしたのは、〈エクスプローラー〉の誰かだった」

永沢はじろりとこちらを睨み、吐息交じりにこう答えた。

「そういうこと、考えるような余裕ないんだよ、今は」

(つづく)